

初雪の恋～ヴァージン・スノー

2007(平成19)年4月12日鑑賞(角川映画試写室)



監督＝ハン・サンヒ／出演＝イ・ジュンギ／宮崎あおい／塩谷瞬／森田彩華／柳生みゆ／乙葉／余貴美子（角川映画配給／2007年日本・韓国合作映画／101分）

第3章

ヒロインの個性・職業も千差万別

……韓国一美しい男イ・ジュンギと、今や新世代の国民的大女優となった宮崎あおいが共演し、日韓友好の架け橋となるのが、タイトルそのものをテーマとしたこの映画。ストーリー的にはいまひとつだが、美しい京都のまちあちこちと日韓の言い伝えや習慣あれこれをネタにした若い男女の淡い恋の展開は、それだけで見どころ十分……。盧武鉉政権が末期的症状を呈し、日韓関係がヤバくなりかけている今（？）、こんな映画で若者たちの日韓交流の復活を願いたいものだが……。

🎬 「美しい国」と「景観法」の普及・定着に一役を……

安倍内閣は2006年9月「美しい国」をキャッチフレーズとして発足したが、残念ながらその先行きはまだまだ不透明……。他方、小泉内閣時代の2004年6月に成立し、翌2005年6月に全面施行された景観法は、2005年9月近江八幡市で「景観計画区域」第1号が指定されるなど、全国で少しずつその広がりを見せている。また、去る3月13日、この景観法に根拠をもった「委任条例」としての「京都市景観条例」が、京都市議会で賛否両論渦巻く中で可決成立したが、これは良好な景観保全のためにマンションの高さを規制（＝私権を制限）できるという画期的な内容を含むものだから、今後全国から注目されることまちがいない。私が現在執筆準備中の『景観・眺望紛争の上手な対処法』でも、大きくこれに注目し、分析中だ。

この『初雪の恋～ヴァージン・スノー』は、淡い男女の恋の背景にそんな美しい京都の景観をタップリと取り入れた映画だから、「美しい国」と「景観法」の

普及・定着に一役買えるはず……。都市問題や再開発問題そして景観問題に弁護士として20年以上取り組んでいる私としては、そんな法的視点からもこの映画を見てもらいたいものだが……？

日韓友好にベストの映画……

日本時間の4月12日午前中は、アメリカのボストンにおけるレッドソックスの松坂大輔 vs. マリナーズのイチローの7年ぶりの対決が大きな話題を呼んだ。しかし、実はそれ以上に重大なニュースは、中国の温家宝首相が、中国の首相としてはじめて日本の国会で演説したこと。これによって、最悪だった日中関係は多少改善するのでは、と期待されているが、さて……？

他方、盧武鉉大統領の支持率が急速に低下し、政権の末期的症状を呈しているのが韓国。盧武鉉政権が基本的に反米・親北政権であるのは仕方ないとしても、ここまで政治が混乱し、2007年12月の大統領選挙に向けて政局が混迷化していくと、日韓関係にもさまざまな悪影響が……。

そんな現在の局面において、ややこしい政治問題を忘れさせてくれるうえ、日韓友好の一服の清涼剤となることまちがいないのがこの映画。格別何らかのアピールがあるわけでもなく、そのタイトルどおりの淡い恋を淡々と描いているだけだが、日韓の若者たちの交流と親善にはベストの映画……？

こんなワンイッシュ映画(?)には、ベストの二枚看板……

2005年の9・11総選挙は郵政民営化をめぐるワンイッシュ選挙だったが、この映画は韓国からの転校生キム・ミンと京都の女子高生、佐々木七重との、初雪をワンイッシュとした淡い恋を描くもの。したがって、この2人の他にも冒頭記載の人物たちが登場するが、それはすべてほんの数シーンだけで、ホントの脇役。

つまりこの映画は、『王の男』(06年)以来、韓国一「美しい男」と呼ばれるようになったイ・ジュンギと、『初恋』(06年)、『好きだ、』(05年)などの名演技と、NHKの朝ドラ『純情きらり』での主演そして平成20年の大河ドラマ『篤姫』への大抜擢などで、今や新世代の国民的女優となった宮崎あおいの二枚看板で成立している映画。

もちろん、日韓両国には若手の有望株がたくさんいるが、こんなワンイッシュ映画には、日韓のこの二枚看板がベスト……。

言い伝えあれこれ、習慣あれこれ……

もともと韓国も日本も中国文化を受け継いできた国（民族）だが、その生活の中に根付く言い伝えや習慣の相違はいろいろとあり、興味深い。日本語を全然話せないのに、陶芸家である父親の仕事の都合でソウルから京都の高校に転校してきたミンは、毎日マウンテンバイクで楽しく京都のまちを見学していたが、実際に生活していくのは大変なはず……。

しかしこの映画は、日本への韓国人留学生の多くがもつ言葉の壁を中心とした問題や悩みを全く見せず、逆に日韓の若者交流に役立つ言い伝えや習慣をうまく対比しながら登場させることによって、2人の恋を盛りあげている。

その第1は、この映画のタイトルとなっている初雪。韓国では、恋人たちにとって初雪は非常に大切で、「初雪が降ったらここで会いましょう」という約束は、韓国ではスタンダード……？



©2007 角川映画・CJ Entertainment・Dyne Film

第2はそれと逆で、嵐山にある渡月橋がかかる桂川にある、ボートにまつわる言い伝え……？ つまり七重が言うには、ここでは「カップルでボートに乗ると別れる」といううわさがあるらしい。何も知らないミンは、そんな禁を犯してしまったが……？

他方、習慣の違いとして面白いのは指切りげんまん。この習慣は、口頭の約束より強い拘束力がある約束として韓国にもあるらしいが、興味深いのはそのやり方。日本では小指を絡めて「指切りげんまん、嘘ついたら針千本飲ます」というのがスタンダードだが、さて韓国では……？

日本人同士のカップルなら話題にもならないそんな言い伝えや習慣のあれこれが、日韓の若い男女だとすべて新鮮な話題になるから、そんな意味では、異国間の男女交際の方がうまくいく確率が高いのは当然……？

小道具あれこれ……

ミンがはじめて七重と出会ったのは松尾大社の境内だが、そのときの七重の姿は巫女衣装。何とも清楚で初々しい宮崎あおいの巫女姿には私がうっとりしたほどだから、ミンが一目惚れしたのは当然……？ てなわけで、韓国人監督ハン・サンヒが、日本のそして京都の美しさを韓国人に紹介するための小道具の第1は、まずは七重の巫女衣装。ケバい化粧が大好きで、プチ整形をくり返している韓国の若い女の子も、こんな清楚な宮崎あおいの美しさをスクリーン上で観れば、今後は服装も化粧方法も少しは変わるかも……？

第2の小道具は、これも純日本風のおみくじ。大吉を引いた、日本語の全くわからないミンに対して、「Very Lucky」と説明している七重の姿は奇妙だが、そんな会話自体が2人の距離をグッと近づけるもの……？ 私は、買ったおみくじは見終わった後、木の枝に結びつけるものだと思っていたが、七重の説明によると必ずしもそうではなく、大吉の札はずっと自分で持っておくべきものらしい……？ したがって、七重の言うとおり、ミンはそのおみくじをずっと「キープ」していたが、物語が進行していく中、そのおみくじの行く末は……？ このおみくじが大切な小道具となるから、是非それに注目を……。

そして、第3の小道具はお守り。日本ではあちこちの観光名所に行くと、いろ

いろなお守りを売っているが、それを買って家に持って帰っても、結局引き出しの中にしまってしまうケースが多い。

しかしこの映画では、お守りの中に入れた七重の一通の手紙が大きな意味を持つことに……。もちろん、このお守りはいかにも京都風の商品だから、この映画を観た韓国の若者たちの間でこんなお守りの交換がはやれば、日韓の経済交流にも大きな貢献を……？

こんな暖冬が続くと……？

今年の日本は3月に入って寒い日が出現したが、2月の暖冬は異常なものだった。アメリカのゴア元副大統領が出演し第79回アカデミー賞長編ドキュメンタリー賞を受賞した『不都合な真実』（06年）が世界的に話題を集め、二酸化炭素を中心とした地球温暖化問題が今や大問題となっているが、ここ数年の暖冬のせいで、大阪以西では雪を見たことがないという日本人が多いはず……。京都は結構寒いから、今年はまだ初雪を見ることができたかもしれないが、こんな暖冬が続けば、近い将来京都も雪とは無縁な地方になってしまうかも……？

韓国のソウルは京都よりかなり寒いから、まだまだ雪が絶えることはないだろうが、こんな暖冬が続くと、初雪をテーマとした恋人たちの言い伝えも空虚なものになってしまううえ、この映画の成立基盤そのものが失われてしまうことに……？

韓国男は……？ 京都女は……？

韓国の男性は何ゴトにも激しやすいうえ、ケンカっ早いのが特徴……。韓国映画を観ているとそんな風に思ってしまうが、韓国一美しい男イ・ジュンギが演ずるミンも、テコンドー3段の腕前らしいから、ケンカの腕は相当なもの……。転校のあいさつをしたその日のうちに、ミンが小島康二（塩谷瞬）らを相手にその腕前を披露したのはちょっとした誤解からだったが、何ゴトに対しても積極的（強引？）で前向きなのが韓国男……。？

したがって、今ドキの若い日本人男性が失ってしまった野性味と奔放さをもっている韓国男は、日本人女性には魅力的……。？

これに対して、宮崎あおい演ずる七重は、いわゆる京オンナの典型として、待つ女、耐える女のイメージをしっかりとキープしている。ホントは京都人は本音と建前がひどく乖離しているため、日本で最も扱いにくい人種と言われているはず……？ これは、弁護士としてさまざまな交渉に当たってきた私の33年間の経験にもとづく実感でもあるのだが、この映画でハン・サンヒ監督が描く京オンナのイメージは、とにかくじっと耐えて待つ女……。きっと素顔の宮崎あおいはそんなタイプではないと思うのだが、さすが演技派の若手女優らしく、そんな待つ女、耐える女の役をしっかりと……。

この映画でも雨が重要な演出を……

若い男女の恋の成立に雨が大きな役割を果たした韓国映画の名作が、『ラブストーリー』（04年）だった（『シネマルム4』127頁参照）。また、私は昨日、1945年に公開されたフランス映画の名作『天井桟敷の人々』を観たが、ここでも突然降ってきた雨によって、2人が安宿に入る事になり、思わぬ展開に……？

このように、映画において雨は重要な演出を担うことが多いが、この映画でも南禅寺の三門で絵を描いている七重の元へ自転車で駆けつけ、アルバイトで稼いだ金でやっと買った「あるもの」をミンが七重に手渡そうとしている時、突然降り出してきたのが雨。現実には、こんな風にうまく雨が降ってくれることによって、2人だけの空間が作り出されることはマレだが、そこは映画の世界だから何でもあり……？

急いで七重の写生道具を片づけ、三門の下で雨宿りしていた2人は次第にいい雰囲気……。日本語が全くしゃべれないミンと並んで立った七重が、差し出す手のひらには次々と大粒の雨が……。

しかして、こんなケースにおける2人の会話は、日本語で「雨」を説明し、韓国語で雨を表す「피」という単語を説明することだが、それだけの会話で2人の距離は急接近することに……。

七重にはある重大な家庭の事情が……

淡く美しい若い男女の恋を真正面から描くこの映画の中で、唯一現実的な問題

に引き戻されるのは、あれほど笑顔のステキな七重が、妹の百合（柳生みゆ）と共に家庭内で大きな悩みを抱えていたこと……。

近時、『東京タワー』（04年）、『椿山課長の七日間』（06年）、『子宮の記憶／ここにあなたがいる』（06年）、『愛の流刑地』（06年）、『となり町戦争』（06年）と出演作が続いている余貴美子が七重の母親役に扮しているが、実はこの母親が大問題……。その詳細と問題点はあなたの日で確認していただきたいが、そんな重大な家庭の事情によって、七重たちは京都のまちを離れなければならないことに……。そしてそれが、この映画における2人の「逢いたくて、逢えなくて、逢いたくて。」という何ともまどろっこしい展開を生む原因に……。

後半はソウルの美しいまちをタップリと……

この映画の後半は、前半とうって変わりソウルの美しいまちがメインとなるので、それをタップリと楽しみたいもの。もともと絵が大好きだった七重は、ミンとの交際の中で少しずつ韓国語も覚え、今やその作品は韓国で認められることに……。しかし、七重はあくまで「待つ女」そして「耐える女」だから、自分からミンに対してモーションをかけることなど全くなし……。したがって、そんな2人がある日、ある時、韓国のあるところで出会えたのは、まさに奇蹟……？

韓国での2人の再会にそれほど大層なストーリーがあるわけではなく、あくまで映画上的設定としての偶然によるものだが、この際そんな難しい話は横におき（？）、単純に若い2人が再会できたことを喜ぼう。しかして、この映画のハッピーエンドのあり方は……？

2007(平成19)年4月13日記